



昭和四十九年（一九七四）の台風八号の時、消防署員として、次から次へと土砂災害の悲惨な現場を目の当たりにしながら、土砂に埋まった人の救出に当たった人の証言です。

「生き埋めがおるから来てくれ！」との大声で最初に向かった現場は、たちばな橋地区の斜面に建つ住宅密集地でした。現場は上方より幅五〇メートルにわたり原型を止めず流失し全壊していました。付近一帯にガスが漂い、汚物の激臭げきしゅうが鼻を突く中、急な斜面を不明者が多くいると思われる上方を目指し駆け登りました。

ようやく私たちが辿り着いた最高所の家は半壊し、この家の上方にあつた数軒の民家の残骸の一部がもたれかかっています。地元の人々が必死に救出作業を続ける家の合間から、うめき声が聞こえました。キャツプライトの光に入ったものは、土塊と化した被災者の姿でした。二畳くらいの場所に木と土砂に埋もれ二人の重傷者が出ており、その二人に重なり合うように骨折し、流血した遺体がありました。私たちは地元の人々と共に必死に救助作業を続けるとともに、無線で医師の要請ようせいをしました。

そして、私たちは息つく間もなく次の現場へ向かいました。土砂の撤去てつきよ作業を開始しましたが、根がついたままの大木と土砂に埋もれた石に、作業は難航を重ねました。しばらくして隊員の一人が水浸しの土砂の中から手指の一部を見つけ、早速発掘にかかりました。作業が進むにつれてやや横向きの遺体は徐々に全容を現しましたが、木と石にはさまれた遺体を傷つけないよう気づかい、素手での作業が主となり大変難航しました。

すぐ横で変わりはてた母親を待つ女子高生の手には真新しい毛布が用意され、取りみだすことのないその姿があまりにも痛々しく映りました。



背景

昭和49年（1974）7月6日夜、台風8号による集中豪雨が小豆島一帯を襲い、大きな被害をもたらしました。小豆島町橋地区、福田地区、岩ヶ谷地区等では死者29名、重軽傷者21名、家屋の全半壊249棟という大惨事に見舞われました。

アクセス

砂防堰堤（橋地区）

- 小豆島町役場内海庁舎より東北東へ直線距離約3km
- 小豆島町橋
- 緯度経度 北緯34度29分28秒，東経134度20分25秒

